



心の歌を奏でて

—ぐるみん— ①

芳田尚哉

目の前の光景を言葉にすると――

もふもふ、

そんな感じだった。

「なんだ、ここは……」

なんだか、絵本の世界に来たみたいというか、建物がどこかメルヘンな感じがする。洋風の建物が並んでいるが、どれもこれも現実味がない。

「ここって、本の中……なのか？」

本当にそうとしか思えない。全く現実味がない。

それよりも、なによりも……。

「すごいね、トールちゃん。動物さんがいっぱいだよ」

そうなのだ。

着ぐるみとも思えない。

しかし、目の前には、動物が二足歩行をしているのだ。

「なんだ、これ……」

俺たちは絶句するしかない。

歩いている動物は、リアルな姿ではなく、どこかぬいぐるみのようなのだ。

かといって、着ぐるみなのかと思いきや、あまりにリアルすぎる。

まさか、この世界の人たちは、着ぐるみの着用が義務なのだろうか。

「ねえ、トールちゃ……ん？」

キヨカが不思議そうに俺を見る。

「どうかし……えっ？」

なにかあったのかとキヨカがいる方を見ると、そこにはなんだか鳥の姿をした人(?)がいた。

「トールちゃん、それって……」

その鳥は、俺に向かって喋っている。その声は、間違いなくキヨカだ。

「マジかよ……」

本当にキヨカなのか？

「トールちゃん、それって……オカピだよね」

キヨカらしい鳥が、手というか羽をぱたぱたとさせる。

オカピって……なんだ？

っていうか、キヨカらしい鳥は……なんだろう？ 燕っぽいけど……。つうか、燕だよな。

「どうしたの、それ。って、もしかして私も？」

と、自分の姿を見ようとするが、どうすれば自分の姿を見れるのかと思案しているようだ。

俺も自分の姿を見ようとして、とりあえず手を見るが……。

「あれ？」

どうも普通だ。

俺の手はぬいぐるみっぽいわけじゃない。普通の手だ。そもそも、俺は着ぐるみを着た記憶はない。それに、着ているという実感もない。

そうなのだ。俺の感覚では、全く普通。普通に服を着ているだけで、着ぐるみは着ていない。「どうなってるんだ？」

もう、わけがわからない。

そもそも、わけがわかるはずもないんだが。

自分を見る分には普通だ。だが、他の誰かは、人間の姿じゃなく、動物の着ぐるみのように見える。

「この世界、変だよ」

言われなくてもわかるって。

だが、言葉にすると、改めて感じる。

「変……だよな」

周辺を歩いている人（だよな？）たちは、特に変に思っていないようだ。これが普通らしい。もっとも、こういう種族ならわかるのだが、俺たちまでこうなっているとすると、これはこの世界の摂理だろう。

「これってやっぱり蟲(ベステート)の影響だよな」

「そうだよね」

それ以外考えられない。これが異常なしだとしたら、俺の頭がおかしくなったって事になるよな。

「それにしても、面白い世界だね」

「そうだな」

変な事になっているから、確かに面白いけど……。それで済ませられる状況なのか微妙だ。

元はどんな世界なのか、ここは日本なのか、それとも別の国なのか、そういう事が全然わからない。

「あっ、トウキョウトガリネズミさんだ。あっちにはヌートリアさんだ」

キヨカは、周囲を見ながらはしゃいでいる。

つうか、なんだその名前は。

トウキョウなんとかネズミは、その名前からネズミなんだろうなってわかるけど、もう一つの……なんとは、想像すらできない。

まあ、キヨカの指す先を見ると、大きなネズミっていうか、ビーバーじゃないけど、なんだかそういう感じの動物がいるから、それがそうなんだろうな。名前はわからんが。

他にも兎とか熊とか猿とか、そういう着ぐるみがたくさん歩いている。

きっと、それらも色々な種類があるんだろうけど、俺にはさっぱりわからない。

キヨカは、あっちはあれだとか、あそこにはあれがいるだとか、俺が聞いた事もない名前を言っているのだから、俺には理解できない。まさに、違う世界の言葉だ。

もう、頭がどうにかなりそうだ。

あまりの事にしゃがんでいて、

「どうかされましたか？」

と、誰かが声を掛けてきた。どうやら、俺を心配してくれているらしい。

「あ、いえ……大丈夫です」

と、顔を上げると、そこにはイルカがいた。

なんだ、これは。

確かにイルカも哺乳類なんだけど、陸地で歩いているのを見ると、なんというかシュールだな

。

「オカピさん、大丈夫ですか？」

「トールちゃん、大丈夫？」

イルカとツバメに訊かれているこの状況、どうにかならんのか。

「大丈夫です」

「すみません。トールちゃんなら大丈夫みたいです。……って、アマゾンカワイルカさんだあ」

キヨカはなんだかはしゃいでいる。

なんだ、それ。そういうイルカなのか。名前からなんとなく、どういうイルカなのかわかる。ある意味、わかりやすいそのままの名前だよな。

「そうですか、それならよかった。ハリオアマツバメさんは、オカピさんのお連れの方ですよね」

「……ハリオアマツバメって私の事？ ……だったら、そうですよ。一緒に旅をしてるんです」

キヨカはなんだか楽しそうだな。

っていうか、なんだその名前。キヨカはなんとかツバメっていうんだ。初めて聞いたのでよくわからなかったが。

とりあえず、キヨカはわかっているらしい。

つうか、こいつのこの知識はなんだろうね。常識じゃないよな。俺が不勉強ってわけじゃないよな。

本当に聞いた事もない。

「そうですか。旅をされて……。この国はどうですか？」

「今来たばかりなんですけど、なんだか面白いです」

「そうですか……。しばらく滞在されるんですか？」

「はい。まだ未定なんですけど、しばらくはここにいます」

「そうなんですか。……そうだ、宿は決まっていますか？」

「まだなんです。本当に、今来たばかりで……」

「それでしたら、知り合いが宿を経営しておりますので、よろしければそちらを紹介しますよ」

「本当ですか。ありがとうございます」

と、そんな感じで、キヨカは話を進めていく。

もう、なんでもいいんだけどな。

「オカピちゃん、それでいいよね」

と、キヨカがこっちを向く。

オカピって俺の事か？

「ああ、いいんじゃないか」

このメルヘンというか、ファンタジーな状況に、判断能力がなくなってきている。どうとでもなれ。

「そういうわけで、お願いします」

「わかりました。それでは、ついてきて下さい」

そんなわけで、俺たちはなんとかイルカのあとについて歩く。

(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

「へえ～、ここって、そんな名前の国なんですか」

キヨカはにこやかに、なんとかイルカと話している。

なんとかイルカが言うには、ここは.....なんだっけ？

「それにしてもさ、オカピちゃん。サンクテーコ・モエモエ・デュクランドって、どこにあるの？」

「それは.....俺に訊くな」

サンクテーコ・モエモエ・デュクランドなんて名前、初めて聞いたぞ。

つうか、俺の事をオカピって呼ばれても、馴染みがなさすぎて反応できないんだって。だが、ここでの呼び方は、見た目の動物の名前になっているっぽいので、俺はオカピだし、キヨカはなんとかツバメだ。えっと.....ハリオアマツバメか。そんなのなかなか覚えられないぞ。

俺の苦悩は完全無視で、二人は楽しげに話している。

「ハリオアマツバメさんたちは、どこから来たんですか？」

「私たちですか？ 私たちは、日本という所からです」

「ニッポン.....ですか。初めて聞く名前ですね」

「そうですか.....」

キヨカはどこか淋しそうだ。

「おいおい、どうしたんだよ」

「なんだか、日本を知らないっていうのが、日本人として淋しいな.....って」

そんな事かよ。

まあ、愛国心だろうな。

確かにわからなくはないが、俺たちだってこの国の名前を知らなかったわけだし。

そもそも、ここって俺たちが知っている地球かどうかともあやしいぞ。俺が知っている世界地図に、この国の名前はない。

「ちょっと待てよ」

するってえと、ここは異世界って事なのか。

前の世界は、日本だったみたいだから、すぐに順応できたのもあって、普通の旅行気分だったのもあるんだが、さすがに外国という枠を超えて、異世界ってのは.....。

それにしても、異世界でも日本語って通じるんだな。

と、近くの店の看板を見ると.....。

「なんだ、これ」

アルファベットで書かれているのはわかるのだが、見た事もない単語だ。

それも一店舗だけでなく、他もそんな感じだ。

やっぱり日本語じゃないらしい。

しかし不思議な事に、俺たちの言葉は通じているし、向こうが話している事も理解できる。そしてさらには、この文字だって意味が分かるのだ。まあ、店名がほとんどで、それがどういう店

なのかわからないんだが。それでも、苦なく読める。

「どうなってんだ」

キヨカはこれに気付いているのかいないのか……って、気付いてないだろうけどな。
あまりにも自然に話しているせいで、この不思議な現象に気付く事はできないだろう。
本当にどうなってるんだ？

わかる事に越した事はないんだが、見た事もない単語なのにわかる。

これも能力なのか？

だとしたら便利だな。

色んな世界に行くなら、言葉が通じないと不便だもんな。

異世界だとなおさらだろう。地球で使われている言語じゃない場合だってあるだろうし。そう
なると、どうしようもないからな。

そもそも、俺たち自身が日本語以外を喋れない。英会話なんか、片言でなんとか喋るだけでも
んな。

この能力があれば、英語の試験なんてチョロいな。

そんな事を考えていると、どうやら到着したらしい。

「ここです」

そこは、小さなビルという感じの建物だった。しかし、煉瓦造りでちょっとお洒落な感じだ。
ヨーロッパにありそうだな。

「なんか、可愛いですね」

「そうですか。ささ、どうぞ中へ」

俺たちはなんとかイルカー—アマゾンカワイルカに招き入れられ、その宿に入っていった。

「……………」

「すっごおい」

中には、色々な着ぐるみたち—この世界の人たちがいた。

やっぱ、この光景は馴染めそうにない。

着ぐるみにしか見えない人たちがうようよいると、メルヘンを通り越して、頭が痛くなって
くる。

「ガラパゴスペンギンさん、お客だよ」

「おお、案内ありがとよ」

イルカとペンギンの会話だぞ、これ。すげえ。

それにしても、ガラパゴスペンギンなんて初めて聞いた。確か、ガラパゴスって、結構赤道付
近じゃなかったか？ そんな所にペンギンなんぞいるのか。ペンギンといえば、南極のイメージ
なんだが……。

「毎度、うちに案内してもらって、すまん」

「いって事よ。俺とお前の仲だろ」

「ありがとな」

イルカとペンギンの関係ね……。哺乳類と鳥類だよな。しかし、アマゾンもガラパゴスも近い

から、そういう関係でいいのか？ いいんだろうな。

「じゃあ、しっかりもてなしてやってくれよ」

「了解だ」

イルカがペンギンに言って、こっちを見る。

「じゃあ、ゆっくりとこの国を楽しんでいってくれ」

「ありがとうございます」

なんとかツバメのキヨカが、ぺこりと頭を下げる。慌てて、俺も頭を下げた。

「よかったね、オカピちゃん」

ん？ あ、ああ、俺か。

「そうだな。とにかく、宿はここにするか」

見たところ、ぼったくりのような感じもないし、高級ホテルって感じでもない。普通の宿って感じだから、お手ごろ価格なんだろう。

「えっと……一泊いくらですか？」

なんとかツバメのキヨカが訊く。

「二人一部屋でよろしいですか？」

「はい」

即答しやがった。まあ、同室の方がいいんだけどな。変な意味じゃなく。

「それでしたら、お二人一室一泊素泊まりで一五〇s t e l oです」

一五〇か……。高くはないな。むしろ安いのかな。円に換算すると四〇〇〇円くらいか。

「オカピちゃん、いいよね」

「ああ、いいんじゃないか」

というわけで、俺たちはここに泊まる手続きをする。パスポートとか、そういうのが必要だったらまずかったが、国外の人間でも普通に身分証明なく泊まれるみたいでよかった。まあ、前払い制だったからかもしれないが。

案内された部屋は、簡素なものだった。

ベッドが二つと小さなテーブルと椅子。それくらいだ。床は板張りのままで、カーペットなどはない。どうやら、完全に土足でいいらしい。

まあ、寝るだけだしこれで充分だろう。

俺たちは、荷物を置くと部屋を出て、この国を散策する事にした。

異世界なんて、滅多に……ってというか、来るような事はないから、ゆっくり堪能したかったが、そういうわけにもいかない。

なにせ、前の街でゆっくりしすぎた。半月ほど、あそこで過ごしたわけだ。このペースだと、一年くらい掛かってしまう。すると、俺たちは欠席日数が増えていき、あっという間に留年決定になりかねない。それは勘弁願いたい。

というわけで、俺たちはペースを上げていかなければならない。キヨカもこれを理解している。

さすがにトロリーケースをガラガラとさせてられないので、最低限の荷物だけを持って部屋を出る。

キヨカは小さなリュック。俺は風伯。本当に最小限だ。風伯は、常に持ち歩かないと、いざという時にどうにもできない事を学んだので、邪魔だと思える時でも持ち歩く事にした。こうして、徐々に学んでいくんだな。

街に出ると、うようよと着ぐるみがいる。この光景は、なんだか頭が痛い。

それにしても、知らない動物たちがうろうろしているのは、ある意味では面白いんだけどな。哺乳類、鳥類、魚類、爬虫類、両生類……それらが関係なく、二足歩行してるんだから奇妙だよな。

それにしても、よく考えれば、自分じゃ自分がなんなのかわからない。周囲がそう呼ぶから、そうなんだろうと思うけど、実際は違ったりする場合もあるんだろうか。

それにしても、オカピってなんだよ。聞いた事もないぞ。自分の姿を見れないから、どういう動物なのか確認できないのがもどかしい。

変な顔の動物じゃないよな。名前から想像できないのがどうもな……。

キヨカみたいに、なんとかツバメとかだったら、なんとなく想像できるんだが……。

気になる。すっげえ気になる。

そんな事を考えながら、着ぐるみだらけの中を二人で歩く。

「なんだか楽しいね、オカピちゃん」

キヨカがにっこりと笑っている。不思議だが、着ぐるみっぽいのに、表情はわかったりする。つくづく不思議だ。

ととと、こんな世界からおさらばしたい。

初の異世界がこうだとは……。

まあ、俺たちのような人類がいるとは限らないけどさ。確かに、トカゲ人間とか、そういうのがあってもいいんだろうけどさ。だけど、着ぐるみはないだろ。

しかし、これが蟲(ベステート)の影響でなってるんだとしたら、この国の人たちは、違う姿をしているんだろう。

それって、ちょっと気になるな。楽しみだ。

「よし、さっさと蟲(ベステート)を見つけるぞ」

「ん？ オカピちゃん、なんだかやる気だね」

「おうよ。キヨカも頑張ろうぜ」

「.....オカピちゃん。ここじゃ私は、ハリオアマツバメだよ」

じと目で訂正された。

「うっ.....わかったよ。ハ.....なんだっけ？」

「ハリオアマツバメだよ。ハ・リ・オ・ア・マ・ツ・バ・メ」

しっかりと強調された。

「えっと、ハリオ.....」

「ハリオアマツバメ。いい加減、覚えようよ」

「そんな事言われてもな.....。そんなツバメ、知らないっての」

「本当に大学生？ こんな常識でしょ。誰でも知ってるよ」

嘘だ。絶対に嘘だ。誰でも知ってるわけねえ。俺の人生で、初めて聞いたもんな。

「ツバメじゃだめか？」

「だめだよ！」

キヨカは腰に手を当てて睨んでくる。

「うっ.....」

言葉に詰まる。

こうなったら、なにがなんでも覚えるしかないのか。

しかし、すぐに覚えられないよな。そんなに長い名前じゃないんだけど。

「とにかく、覚えなさい」

「わ、わかったよ」

キヨカが先に言って、俺がそれを繰り返す。なんだか、初めての英会話教室みたいだな。とにかく、そんな事をしつつ、てくてくとあるいていると、目の前から巨大ななにかがやってきた。

それは、明らかに恐竜時代にいたであろう存在だ。

「あれって.....ブラキオサウルス？」

巨大で首が長い。しかし、着ぐるみなので二足歩行。

ブラキオサウルスなら、俺だって聞いた事くらいあるぞ。確かにそんな感じだな。

「やあ、ブラキオサウルスさん」

「こんにちは、タスマニアデビルさん」

.....やっぱり、不思議な会話だ。

タスマニアデビルって、初めて見るな。名前は聞いた事あったけど。

それにしても、それが同じくらいの.....いや、ブラキオサウルスは大きいんだが、それでも巨人ってほどでもないし、普通の人と背の高い人の会話みたいなもんだけどな。

とにかく、ブラキオサウルスであっているらしい。

「すごいね.....。恐竜さんまでいるんだね」

「みたいだな」

びっくりだ。まさか、恐竜までいやがるとは。どうなってやがるんだ。

確かに、俺たちの世界では絶滅しているが、この世界じゃそうでもないのかもしれないな。その辺はよくわからない。ただ、目の前に確かに存在している。

それから、俺たちはトリケラトプスや、ヴェロキラプトルや、プテラノドンや、パキケファロサウルスや、サーベルタイガーなどを見かけた。

ただ、どれも着ぐるみなんだがな。

「あれって、クリオネさんだね」

「おおっ」

キヨカ……ハリオアマツバメが指した先には、確かにクリオネがいた。

「でかいな……」

くどいようだが着ぐるみだ。つまり、俺たちと同じようなサイズなわけで……。このサイズのクリオネって、可愛さよりも不気味さが勝ってる気がする。

「でも、大きいと怖いかも」

どうやらハリオアマツバメもそうらしい。ああ、ややこしい。つい、キヨカって呼びそうになる。キヨカはハリオアマツバメ、キヨカはハリオアマツバメ、キヨカは……。何度も繰り返す。

「本当に色々な動物がいるね」

「そうだな……って、これだったら、蟲(ベステート)も紛れてしまってわからないんじゃないか？」

「それはさすがにないでしょ」

キヨカは即座に返してきた。

「そうか？ でも、可能性はあるんじゃないか？」

「だから、大丈夫だと思うよ」

「どういう理屈だ？」

どういう根拠があるんだ？ やけに自信ありげだ。その自信はどこからくるんだ？ なにかあるんだろうか。

「だって、蟲(ベステート)は二足歩行しないだろうし、喋らないだろうし、そもそもオカピさんは気付いてる？ 色々な動物はいるけど、昆虫はいないんだよ」

「……………」

ハリオアマツバメの言葉を聞いて、改めて周囲を見回してみる。

確かに動物園のように、色々な動物がいる。それこそ、魚類まで歩いてるんだ。

だが、節足動物の類はいない。

「本当だ……」

全く気付かなかった。

俺は、この世界の異常さに気圧されていて、さらには知らない動物ばかりで混乱していたのだが、ハリオアマツバメは、どうやら冷静に周囲を観察していたらしい。

蟲(ベステート)はその名の通り、昆虫に似た姿をしているらしい。節足動物を探せばいいって

事か。

「すごいな、ハリオアマツバメは」

本当に感心したぞ。まさか、キヨカが——ハリオアマツバメがな……。

「こんなの普通でしょ。ちゃんと見てればわかるよ」

ハリオアマツバメは、完全に呆れていた。

そんな風にされるような事なのか？ まあ、確かに俺は気付けなかったけどさ。

「すまん」

素直に謝罪。

「オカピちゃんは、ちゃんと観察するように」

「……了解」

なんだか俺が悪者みたいだな。でも、今回ばかりは、ハリオアマツバメの言う事が正しい。俺はもっと観察するべきだった。

この世界がどういう世界なのか、それを知らなければいけない。

ハリオアマツバメに叱咤され、俺は気を引き締めて周囲を観察する。

だが——やっぱり、この着ぐるみだらけなのは、頭痛がしてくる。異常すぎて、俺の処理が追いつかないんだ。精神的に、受け付けられないらしい。

もし、リアルに人類以外の世界に行ったら、俺はどうなっちゃうんだろうか。発狂でもするんだろうか。それとも、感情が麻痺してしまうんだろうか。

まあ、その時にならないとわからないだろうし、それだけ違えば、逆に受け入れられるかもしれない。

そんな心配を今する必要はないんだが。

それから一時間ほど、俺とハリオアマツバメは、街を適当に歩いていた。

「見つからないね」

「そうだな」

色々と名前の知らない動物には会ったのだが、目的の蟲(ベステート)を発見する事ができずにいた。

それにしても、ハリオアマツバメの知識には感服する。どこでそういう知識を得るんだろう。少なくとも、学校で習うはずもない。稀少動物もそうだし、同じような動物でも、微妙に種類が違ったりと、区別できないものまでちゃんと理解してやがる。

「アーちゃんも、場所が特定できないみたいだし」

そうなのだ。蜘蛛(アラネーオ)は、蟲(ベステート)の存在は確認しているのだが、その場所が攪乱されているかのように、特定できないらしいのだ。

もしかしたら、この着ぐるみがそういう効果になっているのかもしれない。

だとしたら厄介だ。

まったく、蟲(ベステート)のやつは、頭がいいみたいだ。

そんなわけで、俺たちはなんの手掛かりもないまま、宿に戻る事にした。

慣れない世界ってのもあって、かなり疲れた。主に精神面が。ゆっくりと休みたい。

「今日はなんだか疲れたな」

「そうだね。私は、結構面白かったけどね」

まあ、ハリオアマツバメは楽しんでたよな。楽しくないわけじゃないんだ。でも、あまりにもあまりな世界じゃないか？ そんなすぐに順応はできない。充分、順応できてきているけど。

初日は収穫なしという事で、明日からもこの辺を散策する事で一致し、ゆっくり休もうと宿の部屋に戻ってきたら――

「うそ……」

「マジかよ……」

部屋の中は、惨憺(さんたん)な状況だった。

(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

「なに、これ……」

宿の部屋に戻って、ゆっくり休もうと思っていたのだが、目の前の光景で全てが吹っ飛んだ。

「どうなってんだよ」

部屋中に、俺たちの荷物が散乱している。主に着替えなどなのだが、それらが部屋中にばらまかれている。

「泥棒……？」

ハリオアマツバメが呟く。

それを聞いて、ようやくその可能性に思い至る。これはどう考えても空き巣だ。

部屋の鍵はきちんと掛けていた。特に異変はなかった。

だとしたら、どういう事だ？

この宿の主人がしたというのか？ 部屋の鍵は、その人しか持っていないだろう。

「オカピちゃん、ちょっと下に行ってくるね」

そう言うなり、ハリオアマツバメは部屋を飛び出していった。

「あ、おい……」

止めるのも間に合わず、ハリオアマツバメは宿の主人の元に走っていった。

「どうすんだよ……」

俺が宿の主人が犯人の可能性があるとかが考えているうちに、その宿の主人の所に走っていきやがった。

とにかく、このままにしておかないとな。

部屋の前で突っ立っていると、すぐに宿の主人を連れてハリオアマツバメが戻ってきた。イルカに連れられたペンギンって面白いな。なんて、そのくらいの余裕は出てきた。諦めとも言うかもしれないが。

「これ、見てください」

ハリオアマツバメは、ガラパゴスペンギンに部屋の中を見せる。

「あ、あの……これは、その……」

一応は客商売だ。散らかっているとか、汚いとか、そういうのは言えないよな。おそらく、どうやっていいのか戸惑っているのだろう。

「帰ってきたら、誰かに荒らされていたんです。怪しい人とか、いませんでしたか？」

しかし、ハリオアマツバメはそういう事に構う事なく、ガラパゴスペンギンに詰め寄る。

「あ、怪しい人物……ですか」

距離をとろうとするガラパゴスペンギン。まあ、誰だって、そんな風に詰め寄せられたらな……

。

「ハリオアマツバメ、ちょっと落ち着けて」

このままだと、怪しいのかどうかもわからなくなる。それを見極めるためにも、ここは一度落ち着くべきだ。

「オカピちゃん、落ち着けて、こんなに荒らされてるんだよ。なのに……」

「まあ、とにかく無くなったものがないか確認しようぜ」

貴重品はほとんどないし、盗むようなものはないように思うのだが、それは俺の主観であって、犯人にとっては違うかもしれない。

「そうだね」

ハリオアマツバメもようやく落ち着いたらしく、ガラパゴスペンギンに立ち会ってもらって、それぞれの荷物の確認をする事にした。

まずは、大量の香辛料。

これは無事だった。

財布なんかは持っていたので問題なし。

風伯も持っていたので大丈夫。

あとは着替えくらいだけど……。

「そっちはどうだ？」

「大丈夫そうかな……。だいたいの貴重品は持ってたし、着替えくらいだもん」

「そうだな」

「携帯も無事だよ」

そうだな……な？

お、おい。ちょっと待てよ。慌てて携帯を探す。

この旅では、ほとんど使えないと思って、鞆の奥に入れていた。

おいおいおいおいおいおいおいおいおい。

荷物をもう一度確認していく。

おいおいおいおいおいおいおいおいおい。

「オカピちゃん？」

慌てふためく俺を見て声を掛けてくれるのだが、正直俺はそれどころじゃない。

「もしかして……」

うわあ……。考えたくねえ！ マジで考えたくねえ！

「オカピちゃん……」

「ない」

「探した……よね」

「ああ、探しまくったさ。お前も見てたろ」

つい、大きな声で怒鳴ってしまう。

「そうだけど……」

怯えるような声なんて、初めてかもな。

ちくしょう。

どうして……。

「ちくしょう！」

パンと床を殴る。

「って～」

殴った手が痛い。

なんだか最悪だ。

携帯を盗まれた。

その事実を受け入れられない。

確かに、泥棒からすれば、貴重品に思えるのはそれくらいだろう。

「お客様……」

心配そうに、ガラパゴスペンギンが声を掛けてくる。宿の主人として、心配してくれてるのか、ただこんな状況に戸惑っているだけなのか。今の俺にはどっちでもいい。

この状況をなんとかしてくれ。

俺の携帯を返せ！

「オカピちゃん……。探そうよ」

「無理に決まってるんだろ。どうやって探すんだよ。犯人の手掛かりでもあんのかよ」

八つ当たりか。

格好悪いな。

そんなのわかってるっての。

でも、わかってるのとは関係ない。こうせすにはられないんだ。

「大丈夫だって」

「なにがだよ。なにが大丈夫だってんだよ。大丈夫なわけないだろ」

優しく肩に手を置いてくれた、そのハリオアマツバメの手を払いのける。

「オカピちゃん……」

その哀しそうな声に心が痛む。でも、そんなのを気にしてる余裕なんてあるかよ。

「最悪だ。こんなのありかよ」

携帯を盗まれるなんて……最悪だ。

「あ、あの……」

ガラパゴスペンギンがなにかを言おうとしている。

「なんですか」

語気を荒げる。

「盗まれたものがあるようでしたら、保安局へ連絡してみてもいいかでしょうか？」

「保安局？」

警察って事か。

「そうですね。すぐに連絡してくれますか」

警察なら、すぐに調べてくれるだろう。

しかし、ガラパゴスペンギンは申し訳なさそうに口を開く。

「それがですね……。夜は閉鎖しているんですよ」

「はあ？」

思わず、反射的に言葉が出た。

これには、ハリオアマツバメもそう思ったらしく、ぽかんと口を開けている。

「どういう事ですか。夜は閉鎖って……。夜になにかあったらどうするんです。警察でしょ。それなのに……」

警察だか保安局だかが、夜は活動していないのは、このガラパゴスペンギンのせいじゃないのだが、今責められるのはこの人だけだ。どうしようもないって、冷静な部分でわかっているけど、言わずにはいられない。

「そのですね。この国は平和で治安もよくてですね」

「現に空き巣がいるんじゃないですか」

空き巣がいるのに、なにが「治安がいい、だ。宿の部屋にこうも簡単に侵入してるじゃないか」。

それもこれも、治安がいいと思ってるから、防犯対策がおろそかって事なのか。

とことん最悪だ。

「ふざけんな。これのどこが治安がいいんだよ。この国じゃ、こんなのは犯罪じゃないってのか」

「い、いえ……その……ですね。このような事は普段ないわけで、それでですね……こちらとしても、どうすればいいのか……」

話しているだけでイライラしてくる。なんだよ、これ。

警察はいない。

犯罪なんて普段ないから、対応できない。

住人が着ぐるみに見えるだけで、なんだかゆるいってのに、頭の中までゆるいのかよ。

「オカピちゃん、ガラパゴスペンギンさんに当たってもしょうがないよ」

「でもな、キヨカ」

「トールちゃん、深呼吸だよ」

そう言って、キヨカが俺を抱きしめる。

「キヨ……カ」

キヨカに抱きしめられると、急に落ち着いてきた。

そして、いつの間にか、呼び方が元に戻っている事にも気付く。

「すまん、ハリオアマツバメ」

「うん、大丈夫だよ、きっと。なんとかなるよ。ううん、なんとかしよう、一緒に。ね、オカピちゃん」

なんだろう。こうされているだけで、すっごく落ち着く。

「サンキュな」

「ううん、いいんだよ」

なんだか、今までの俺が恥ずかしい。

みっともなく騒いで、喚いて。

「あの……」

「明日だったら大丈夫ですよ」

キョカーハリオアマツバメがガラパゴスペンギンに訊く。

「え、えっと……」

「明日だったら、事件として連絡できるんですよね」

伝わっていないと思い、ハリオアマツバメは言い直す。「そうですね。明日でしたら大丈夫だと思います」

「じゃあ、オカピちゃん、明日にしよう。今日はもうしょうがないよ」

「そうだな」

確かにその通りだ。

時間が経てば、それだけ犯人に逃げられるかもしれない。でも、今のままだもどうしようもないんだ。だったら、本職に任せた方がまだ早いんじゃないだろうか。

「悪い」

「どうしてオカピちゃんが謝るの？ 悪いのはオカピちゃん以外だよ」

「……そうだな」

ようやく落ち着いてきた感じだ。

それにしても、ハリオアマツバメのやつ、なかなか手厳しいじゃないか。

俺以外って事は、犯人もだし、この国の警察もだし、この宿もだし、この国全体もだ。さらには、ハリオアマツバメ自身も悪いという事になってしまう。

「ハリオアマツバメは悪くないだろ。それにしても、ありがとうな」

「いえいえ」

俺が言いたかった事が伝わったようで、にやりと笑みを浮かべた。

「そういうわけなので、明日、連絡してくれますか」

「いや、俺たちが行こう。後で、場所を教えてください」

どこかで、この国を信用できないと思ってしまう自分に気付いた。そういう気持ちが少しでもあるなら、自分でするのが一番だ。

もっとも、それなら捜査も自分でするべきなんだろうが、さすがにそれは領分外だ。そこは信じるしかないだろう。

これと比較するのも可哀想だが、日本の警察ってやっぱり優秀だよな。

「それでは……」

と、ガラパゴスペンギンが去ろうとしたので、

「えっと……地図はありますか？」

ガラパゴスペンギンは、驚いたように立ち止まる。

この国の……というか、せめてこの街の地図があれば、警察の場所もわかるはずだ。

「えっと……地図、ですか？」

「ええ。ありましたらお願いします」

少し戸惑っていたようだが、

「それでは、下にいらして下さい」

「わかりました。……ハリオアマツバメは、ここで待っていてくれるか？」

また無人にするのは怖い。だが、ハリオアマツバメを一人にしておくのも怖い。

「うん、一人で大丈夫だと思うよ」

「悪い」

「だから、謝らなくていいんだよ」

わ……と口にしかけて、黙って頷くだけにした。

(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

翌朝、俺たちは荷物をまとめてチェックアウトする事にした。泥棒が入った宿に、連泊するつもりはない。

ガラパゴスペンギンは、どこか安心したような表情だったのが気になったが、警察に行くのが先決だ。

俺たちは、地図を頼りに警察――保安局を目指す。

「見つかるのかな……」

「大丈夫だよ、きっと」

「だといいいけどな」

「それにしてもさ、あの宿の主人のガラパゴスペンギンさんって、なんだか怪しかったよね」

ん？ ハリオアマツバメもそんな風に思ってたのか。

「お前もか」

「オカピちゃんもそう思ってたんだ」

ああ、と頷く。

「私たちが出ていったら、安心してたみたいだし、そもそも、最初に呼んだ時もあまり驚いてなかったっていうか、誤魔化そうとしていたみたいだもんね」

「そうなんだよ。どう考えても怪しい。もしかしたら、あの宿を紹介してくれたなんとかイルカもな」

「そうだね。アマゾンカワイルカさんもグルかもしれないね」

俺たちは、ガラパゴスペンギン&アマゾンカワイルカ犯人説を語りながら、保安局にやってきた。

「本当にここなのかな？」

「教えてもらったのはここだぞ」

目の前には、やたらと大きな石造りの建物がある。何階建てなんだかわからない。

しかし、看板の類が全くないので、本当にここなのかわからない。

「入ってみようか」

「そうだな」

階段とは別にスロープがあったので、そっちを利用して中に入る。

中は人が大勢いた。

なにやら、受付なのか大きなカウンターがあり、いくつもの窓口が設けられていた。なんだか、市役所に来たみたいだ。

どうやら本当にそうだったようで、この建物は役所のあらゆる部署が集まっているらしい。

国全体としては、こことは別に統括している場所があるらしいが、それぞれの街単位は、このように統合されているようだ。

つまり、ここは市役所であり、警察であり、消防でもある。他にも裁判所もここにあるらしい。行政機関が全て集約されているようだ。

そんな建物の中で、保安局があるフロアを教えてもらい、そこへ向かう事にしたわけだが……

。

「疲れた……」

指定されたのは六階。俺たちは、トロリーバッグ+香辛料。

エレベーターなどはないようで、歩いていくしかない。

「頑張って、オカピちゃん」

ハリオアマツバメはハリオアマツバメで、自分の荷物に苦戦している。

俺も一段一段持ち上げては降ろしてを繰り返している。

後からやって来た人たちが、俺たちを悠々と追い越していく。むしろ、俺たちは通行の邪魔になっているようだ。

結局、一時間以上を掛けて、ようやく保安局のフロアに到着した。

だが、俺たちは力尽きて、今にも倒れてしまいそうだった。

「やっとだね」

ハリオアマツバメは、トロリーバッグにもたれ掛かるようにしていた。

「そうだな……」

俺は壁に背を預けて、完全に座り込んでいる。

全部の荷物を持つての移動は、なかなかの重労働だ。

だが、本当の重労働はこれからになるはずだ。

まずは、調書をとって……って、現場保存ができてねえ！ チェックアウトしちまったら、証拠とか掃除されたらおしまいじゃないか。

「ハリオアマツバメ、宿に連絡……」

って、宿に連絡する手段がない。そもそも、連絡先どころか、あの宿の名前もわからない。

しまった……。

ここにきて、自分の失態に気付いてしまった。

「どうしたの、オカピちゃん」

ハリオアマツバメが覗き込んでくる。

「ああ、それがな……」

俺は、今し方気付いた事を説明する。

「うわあ……完全にミスったね。確かにそうだよ。もう一泊するべきだったんだ」

それはともかく、部屋はそのままにしておいてもらうように言うべきだった。

ガラパゴスペンギンの態度からすれば、調査があるから現場保存しておくなんて、とてもじゃないが考えられない。おそらく、すぐに掃除してしまうだろう。

そもそも、散らかっていた荷物は、俺たちが自分で片付けてしまったじゃないか。

自分たちの荷物を恨めしく見る。

犯人の手掛かりは……。

「そうか」

「どうしたの」

急に声を出したものだから、ハリオアマツバメが驚く。

「警察だったらさ、指紋で捜査できるんじゃないのか？」

「.....そうだね。でも、指紋なんて.....。服とかじゃわからないんじゃないの？」

「そうかもしれないけど、可能性はあるだろ。それに、あの香辛料の瓶に触ってるはずだ」

香辛料の瓶は、盗まれてこそなかったが、誰かが触った形跡はあった。つまり、犯人はこの瓶に触っている。服なら無理でも、瓶からなら指紋の採取は可能だろう。

「そうだね。それなら大丈夫かも」

自分たちの行動に愕然としたが、少しだけ光明が見えてきた。

「とにかく、被害届けを出さないとだな」

「そうだね」

少しだけ休んで、俺たちはトロリーバッグを支えにして立ち上がる。

そして、その保安局とやらを探すのだが.....。

下の階にあったような受付のような場所はなく、廊下が続いており、その脇に部屋があるだけだ。そのどれもドアが閉まっていて、しかもドアプレートが全くない。そのくせ、どのドアも同じなのだ。

「わからねえ」

「どこだろうね」

俺たちが思っている警察とは違うんだろうか。

あまり.....というか、行った事がないのでドラマなんかでのイメージしかないのだが、思っているような場所がない。

「とにかく、この階だよな」

「そうだね」

教えてもらったのは、確かにこの階だ。

とにかく、行ってみるしかなさそうさ。

「行ってみるか」

「そうだね」

この階にある部屋に、とりあえず入ってみる事にする。

なんだかムカついたので、ノックをせずに開けてみる。

「すみませ〜ん」

とりあえず声を掛けてみるが.....誰もいなかった。

なんだか拍子抜けだ。

「誰もいないね」

「ああ、そうだな。じゃあ、次の部屋に行くか」

そうして、隣のドアを開けてみるが.....そこにも誰の姿もなかった。

「どうなってるんだ？」

なにかの事務所らしく、事務机に書類がのっているのに、使われていない部屋というわけでは
ないらしい。

しかし、誰の姿もない。

全員が出払っているのだろうか。

首を傾げながら、次の部屋のドアを開ける。

「……………」

「……まただね」

そろそろムカつきも限界かもしれない。この部屋も、無人だった。

そうして、次々とドアを開けていくのだが、どの部屋も無人だった。

「どうなってんだ？」

「不思議だね。誰かがいたっぽいのにね」

どの部屋も、誰かがいた形跡はあった。

しかし、今は人の姿がない。

出払っているにしても、全員が？ それは考えにくい。

今日は休みだとでもいうのだろうか。

夜は誰もいないらしいし、そういう国なのか。

しかし、休みなら下で場所を訊いた時に、そう教えてくれてもいいだろう。

場所を訊かれただけだから、場所を教えたって事か？

確かにそれはそれで正しいのかもしれないが……。

「なんか、間違ってるよな」

「どうしたの、オカピちゃん」

「どうしたもなにも、無人なんてあり得ないだろう」

「でも、あり得てるよ。現実はどうなんだよ」

「……………」

そうなんだよな……。

どう言おうが、現実はこうして残酷にも目の前にある。

「今日も休業日だったのか？」

「……そうなのかもしれないね」

思いたくなかったが、そうとしか考えられない。

どんな重大な事件でも、全員が出払うなんて、常識的に考えられない。まあ、俺たちの常識がどの程度通用するのかって問題はあるけど。

これまでの事を考えると、俺たちの常識は全く通用しないと考えるべきなんだろうか。

「どうする？」

どうするもなにも、誰もいないなんて考えてもなかったからな……。

「どうしたらいいんだ？」

八方塞がりだろうか。

唯一、頼りになりそうなものだったのに、それがこうもあっさりと……。

この国はどうなってるんだ？

警察組織が、こうも休んでいるなんて、平和呆けとかそういうレベルじゃないぞ。問題外だ。

どれだけ平和な国であっても、それはあっちゃいけないだろ。

「自分たちで探してみる？」

「……………それしかないのかもな」

この国の警察組織が頼りにならない以上、自分たちでなんとかするしかなさそうだ。

それにしても、どうなってるんだろうな、この国は。これで成り立っているなら、それこそ異常だろう。

結局、ここへは無駄足になったわけだ。

収穫があったとしたら、この国は異常だとわかった事くらいだ。

そんな収穫、別にいらなかったのにな。

下の階に下りる時も、やはり重労働になった。むしろ、落とさないように気を付けながらなので、上る時よりも余計に疲れた。

ゆっくりと下りて、ようやく下に到着した時は、疲れ果てていた。体力的にもそうだが、精神的にも疲れきっていた。

(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

覇気もなく、だらだらと街を歩く。

ハリオアマツバメは、自分の携帯を見ながら歩いている。

「なに見てるんだ？」

携帯を盗まれた俺には、その行為はちょっとイラっとくるんだけどな。

「地図だよ。オカピちゃんが、撮ったんでしょ」

「地図……？」

ああ、そうか。俺があの時撮影した地図か。

この街の地図があるなら、なにか手掛かりが……って、なさそうだな。目星もなく、闇雲に歩くのは変わらない気もする。

「とにかく、怪しそうな場所を探してみようよ」

「そんなのわかるのか？」

「……………無理っばい」

そう言って、ハリオアマツバメは携帯を俺に渡してくる。

「オカピちゃんが、そういうところを探してよ。私じゃ無理だよ」

「俺だって……」

俺だって、地図だけで初めての場所の事がわかるはずがない。

それでも、なにかないと携帯の画面を見る。

昨日は撮影しただけで、全然見てなかったが、この地図はそれほど書き込まれているものじゃない。

もっとも、建物の名前が全部書かれていたら、それこそ見づらい地図になってるんだけど。

せめて、地図記号なんかでわかりやすくなっているといいんだが、あいにくそういうものはない。あっても、理解できるとは思えないけど。

この地図からは、街の形くらいしかわからない。大きさも縮尺がないから、想像するしかない

。

どうしたもんだろう……。

「役に立ちそうもないな」

携帯をハリオアマツバメに返す。

「とにかく、じっとしててもしょうがないよね」

「そうだな」

とにかく動き回るしかないようだ。

これで手掛かりがあればいいんだけどな……。

日が暮れるまで歩いたが、全く手掛かりはなかった。

「今日はどこに泊まる？」

「そういや、宿か……」

もう、疲れきっていて、なにも考える余裕がなかった。

昨日と同じ宿には泊まれないし、他の宿がどこにあるのかわからない。

こういう時こそ地図の出番のはずなのだが……。それも役に立たない。

こんな地図を、後生大事にして、外部に見せない理由がわからない。もしかして、俺たちにはわからない重要な情報が隠されているのか？ 見る人が見れば、それがわかるんだろうか。なんにせよ、俺たちにすれば無用の長物ってわけだけど。

「その辺の人に訊こうか」

「そうだな。それしかなさそうだ」

このパターンで、あの宿を紹介されたわけだから、あまりいい気はしない。まあ、アマゾンカワイルカさんが、悪意を持って、意図的にあの宿を紹介したとは限らないんだけど。ただ、昔馴染みだったみたいだから、二人がグルって可能性は高い。

「誰に訊こうかな……」

その間も、ハリオアマツバメはまた街行く人たちを物色していた。

誰でもいいような気がしてきた。

一部の人の印象だけだが、この国の人全員が信用できない。

なるほど……世間のワイドショーは、この感情を助長するわけか。自分が直接関わって、ようやくそれがわかった。

だからといって、この国に対する印象が変わるわけじゃない。やっぱり、いい印象はない。

「オカピちゃん、あのウォンバットさんに訊いてみるね」

と、ハリオアマツバメはとてとてと駆けていった。

ウォンバットって……なんだ？

よくわからない名前だったので、街行く人たちを見るが、やっぱりよくわからない。

「すみませ〜ん」

と、ハリオアマツバメが黒っぽい人に声を掛ける。

なにかに似てるような……って、コアラっぽいのか。コアラっぽいけど、鼻は……豚の鼻っぽい。

「あれがウォンバットなのか」

この国に来てよかったのは、動物の勉強ができたって事だろうか。まあ、知らなくてもいい知識だけど。

そもそも、マイナーな動物ばかりだぞ。

俺が感心している間も、ハリオアマツバメはウォンバットに色々訊いているようだ。

しばらく話して、そのウォンバットと一緒に戻ってきた。

「どうしたんだ？」

まさか一緒に来るとは思わなかった。

「あのね、このウォンバットさんって探偵さんなんだって」

「探偵？」

探偵って、あの興信所の？

「そうなんだよ。探偵事務所がこの近くにあるらしいよ」

「探偵事務所？」

「それでね、昨日の事を相談したんだよ」

「.....ああ」

警察がだめなら探偵か。

「それでね、調査してくれるって」

「.....はあ？」

なにを言われたかわからなかった。

「だから、探偵のウォンバットさんが、泥棒を捜してくれるって」

「.....マジで？」

「マジで」

「どういう事だよ」

「だから、私が頼んだんだってば。ちなみにね、助手さんもいて、ハリモグラさんらしいんだよ。会ってみたいな.....」

と、ハリオアマツバメは目を輝かせている。が、ハリモグラってなんだ？ ハリネズミは知ってるけど。

まあ、名前からなんとか想像できるけどな。

ハリネズミみたいなモグラ.....だよな？ ともかく、会えばわかるか。

「保安局は、ほとんど機能していないんですよ。僕もね、昔は保安局に勤めていたんですが、なかなかああいう組織でして.....。辞めて、今はこうして探偵をしています」

と、唐突に話してきた。

びっくりだ。

なかなか渋い声でいらっしゃる。外見だと、正直性別はおろか、年齢とか雰囲気もわかりづらからな。

声の雰囲気からすると、ナイスミドルって感じなんだが.....声だけだからな。実際はもっと若いのもかもしれない。

「オカピちゃん、私たちだけじゃ大変だから、この際頼んでみようよ」

そうだな。

確かに、俺たちだけじゃ、土地勘がない事もあって、難しいだろう。だけど、この人を信用できるのか、俺にはわからない。

ただ、少しでも信用する要素があるとすれば、あの保安局に満足していなかったという点くらいか。だが、それだけで信用できるものでもない。

「オカピちゃん」

「そうだな。お願いしてみるか」

「それとね、事務所に空き部屋があるから、そこを使ってもいいんだって」

.....はい？

ぽかんとしていると、ハリオアマツバメが繰り返す。

「だから、事務所に泊まってもいいんだって」

「.....マジで？」

信じられない。

まあ、このまま宿を探すのも難しいし、誰かに訊いても、昨日の二の舞になりそうだったし、どうしようかと思っていたので、これは渡りに船だろう。探偵事務所だったら、泥棒も入らないだろう。

「では、決まったようですし、行きましょうか」

ハリオアマツバメは、はいと元気に答えて、ウォンバットさんのあとをついていく。

とにかく、これでちょっとは安心できるかな.....。

俺もガコガコとトロリーバッグを引いてついていく。

(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

ウォンバットさんの探偵事務所は、さっきの場所から五分ほどの所にあった。

この周辺は普通の住宅が並んでいるらしく、大通りの建物とは少し趣が違う。

その建物も事務所といっても、なんだか周囲と同じ普通の一軒家のようで、完全に周囲にとけ込んでいて、一見するとそうは見えない。やっぱり、看板の類はない。

この国の人は、どうやって普通の家と商店の違いがわかるんだろう？ なにか、俺が気付いていないなにかがあるんだろうか。

「依頼人だ」

ウォンバットさんが中に声を掛けると、は〜いとかわいい声が聞こえた。

そして、とたとたと足音がして、ひょこっと大きなハリネズミのような人が顔を覗かせる。これがハリモグラなのか。

「ハリモグラさんって、可愛い男の子なんですね」

「えっ？」

俺は思わずハリオアマツバメを見てしまった。

声の雰囲気からして、ハリモグラさんは女の子だろ？なのに、男の子って……。

「別に言う必要はなかったから言わなかっただけだが」

渋い声でそんな事を言われた。

っていうか、否定しないって事は、本当に男の子なのか。

「師匠、こちらが依頼人さんですか？」

「そうだ」

「それでは、こちらにどうぞ」

と、ハリモグラさんに案内され、奥の部屋に入っていく。

木の廊下を通ると、応接室のような――というか、応接室なんだろうな――部屋があった。

「こちらに座ってお待ち下さい」

と、ソファをすすめられたので、俺たちは並んで腰掛ける。

しばらく待っていると、

「お待たせした」

と、ウォンバットさんが向かいに座った。

「事のあらまは、そちらのハリオアマツバメさんに訊きましたが……」

「彼女が話した事が全てです」

どういう説明をしたかわからないが、それほど複雑な説明はいらないので、それで大丈夫だろう。

「そうですね。ガラパゴスペンギンが営む宿で、盗難に遭ったわけですね。そして、盗まれたのがケイタイというものだ……」

一応、ウォンバットさんが確認を兼ねて言ってくれた。

「そうです」

「なるほど……。まずは、その宿の特定ですね。そして、アマゾンカワイルカに紹介された事も重要ですね。二人が共犯の可能性が疑われます」

なるほど。本職も共犯ではないかと思うわけか。まあ、可能性の問題だろうけど。

「それはそれとして……」

と、ウォンバットさんがこちらを見る。

「その、盗まれたケイタイというのはどんなものですか？」

「「……………」」

そうだった。この世界に携帯電話はないんだ。

つまり、この人たちは、なにを探せばいいのかもわからないわけだ。

「えっと……こういうものです」

と、ハリオアマツバメが自分の携帯をウォンバットさんに見せる。

「お借りして、よく見せてもらってもよろしいか？」

ハリオアマツバメは、どうぞと言って、携帯をウォンバットさんに渡す。

「なるほど……これがケイタイというものですか」

ウォンバットさんは、物珍しそうに――実際に珍しいわけだが、携帯を見ている。

「このケイタイというものは、どういうものなのですか。なにやら、これを押すようですが……」

「それはですね――」

と、ハリオアマツバメが説明する。

「なるほど……。デンワやツウシンというものができるわけですか。それにしても、すごい技術だ。離れている者同士で会話ができたり、文字を送ったりできるのですか……」

やはり、この国の人にとっては、異質なものらしい。

俺としては、昔からあったものなので、今じゃ当たり前になっているので、そう思われるのが逆に不思議だ。

「お返しします」

話を聞いた後は、すごく丁寧に携帯を返してくれた。どうやら、精密機器だという認識になったらしく、壊しては大変だと思ったらしい。

未知の技術らしく、それなりの施設に持ち込めば、高く買い取ってくれるかもしれず、今回もそういう施設に持ち込まれた可能性が高いらしい。

「つまり、その施設に行けば……」

「そうですが、問題があるんです」

「どういう事ですか？」

「その施設は、噂の範疇でして、実際にどこに存在するのかなど、わからないのです」

「探偵さんでもわからないんですか？」

ウォンバットさんは、ええと頷いた。

なんてこった。

可能性がある場所が浮上したが、都市伝説程度かよ。期待した分だけ、落胆もあった。

だけど、これが手掛かりだという事は変わらない。

「それでは、明日はまずその宿を探しましょうか」

そうですね、と言おうとした時、

くぅ～

と、音がした。

「やべっ」

俺の腹の虫だ。

「オカピちゃん……」

と、俺を窘めようとしたハリオアマツバメだったが、同じように腹の虫が。

「お二方とも、空腹でいらっしゃったんですね」

「お恥ずかしい限りで……」

顔から火が出るというか、穴があったら入りたいというか、いっそ死にたい……と思うほどに恥ずかしい。

「ハリモグラ、すぐになにか用意できるかい？」

ウォンバットさんが、助手のハリモグラに訊く。

「はい、簡単なものになります……」

「それでは、準備して下さい」

「はい、わかりました」

と、指示をする。

「あ、あの、俺たち……」

「いえいえ、お気になさらず。我々も小腹が空いているので、なにかつまみたいと思っていたところなんですよ」

なんだか、気を遣わせてしまっているというか、申し訳ないというか……。とにかく、このまま厚意に甘えてもいいのだろうか。

考えていると、ハリオアマツバメが小声で話し掛けてくる。

「オカピちゃん、せっかくだし……」

「だけどな……」

せっかく準備してくれているものを断るのも忍びないのだが、だからといって平然と享受していいのだろうか。

「どうせ、今日はこのまま泊まらせてもらうんだよ。とことん、お世話になろうよ」

「そうだけどな……」

確かに、宿も借りるわけだし、既にお世話になっているんだけどさ……。それでも、やっぱり遠慮ってものがあるだろう。

「どうせ、調査費に含まれてるよ」

と、なんとも身も蓋もない言葉が飛び出した。

なるほど……。

そう考えればいいのか……って、

「なあ、調査費用ってどのくらいなんだ？」

そういえば、そういう話は全くしていない。いきなり、巨額の報酬を請求されても、俺たちが払えるもんじゃないぞ。

「そういえばそうだね。必要経費と、報酬でしょ。多分、大丈夫だよ」

ハリオアマツバメは、けらけらと笑う。

「どういう根拠だよ……」

まさかの盲点だった。

いざとなったら、逃げるか。

なんて事まで考えてしまう。

いやいや、それはダメだろ。

「どうかされましたか？」

俺たちの会話が気になったのか、ウォンバットさんが訊いてくる。

「あ、あの……ですね」

訊きづらいのだが、思い切って訊いてみる事にする。

「はい、なんででしょう」

「料金っていくらくらいになりますか？」

よし、言えた。

「料金……ですか？ ああ、調査費用ですか。それでしたら、ご心配いりませんよ。実際はどうかわかりませんが、おおよその見積もりとしては、五〇〇〇 s t e l o ほどにばるかと思えます」

「五〇〇〇、ですか……」

ちょっと待てよ。

五〇〇〇って……。

「ちなみに、宿泊などの経費は別となります」

と、そんな文言が付け加えられた。

「……ですよねぇ」

だとすると、もう少し掛かるかもしれないって事か。

五〇〇〇 s t e l o で、一二五〇〇〇円ってところだろ。

俺たちの世界の興信所の相場ってわからないけど、高くはないんだろう。ただ、俺たちからすれば、充分高いんだけどな。

「オカピちゃん、しょうがないよ」

「……そうだよな」

まあ、俺が携帯を盗まれたのが悪いんだし。

……って、違うだろ。

日本人は、すぐ自分に責任があるように思ってしまうが、悪いのは盗んだ方だ。どういう状況

であれ、悪いのは俺じゃない。

こりゃ、犯人を捕まえたら、きっちりこの費用を払ってもらわないとな。

「とにかく、それをお願いします」

「もちろん、全力で犯人を見つけ出し、そのケイタイも取り戻してみせます」

力強い意気込みだ。これなら、安心できるかもしれない。

そんな話をしていると、隣の部屋からいい匂いがしてきた。

「おっ、そろそろできたようですね」

と、その言葉通り、助手のハリモグラさんが、お盆に載せ、スープらしいお皿を持ってやって来た。

「お待たせしました。時間があれば、もう少し凝ったものもできたのですが、こんなものでお口に合いますでしょうか」

と、俺たちの前にスープ皿を置く。

そして、あとこれも、とバスケットに入ったバケツのようなものも置いてくれた。

「どうぞ、召し上がって下さい。助手の料理は絶品ですよ」

確かに、すごくいい匂いがしている。空腹時にこれはきつい。

「いただきます」

ハリオアマツバメは、待ってましたとばかりにスプーンでスープを飲む。

「うわっ、これすごく美味しいよ。オカピちゃんも飲んでみなよ」

「あ、ああ……」

すごがいりアクションだな。そんなに旨いのか。

匂いが胃袋を刺激するそのスープは、琥珀色の透き通った色をしていて、なにかはわからないが野菜が入っている。

「いただきます」

俺はスープを口に運ぶ。

「……………んっ」

なんだ、これ。

コンソメっぽいんだけど、なんだか魚介類というか、そういう風味がある。すごくさっぱりしているのだが、スパイスだろうか、それが利いていて、食欲を刺激する。

さっぱりしているのに、飲み応えがある。具が多くないのだが、飲んでいるというよりも、液体のはずのスープを食べているという気がしてくる。

俺たちは、あっという間に飲み干してしまう。

「おかわりいいですか？」

ハリオアマツバメが求めると、ハリモグラさんは、笑顔でお皿を受け取る。

「あ、俺もいいですか」

この機に……と、わずかに残っていたスープを飲み干す。

「はい、喜んでいただけで嬉しいです」

と、ハリモグラさんは、空になったお皿を持って、隣の部屋に向かう。

「どうですか。彼の料理は美味しいでしょ」

助手の料理が褒められたのが嬉しいのか、それとも自慢なのか、おそらくは両方なのだろうが、今までにない感じで嬉しそうに話す。

「はい、もう最高です」

「これは旨いです」

「そうですか。気に入っていただけて、こちらとしても嬉しく思います」

どうぞ、パンも召し上がってください、とすすめられ、俺たちはスープのお代わりを待つ間、バスケットのパンを食べる。

これはイギリスパンっぽい感じだった。これは市販らしく、それなりに美味しいものだった。っていうか、あのスープの後だと、なかなか驚けないぞ。

ハリモグラさんがお代わりを運んできてくれると、俺たちはまたがつくようにスープを飲んだ。

結局、もう一度お代わりをして、俺たちは食事を終えた。

「本当に美味しかったです。ハリモグラさんって、本当に料理が上手なんですね」

ハリオアマツバメが褒めると、ハリモグラさんは頬を染めて照れる。

「彼の料理は、この国の料理人と張り合えるものでしょう。それなのに、料理人を目指さず、こうして探偵を目指すというのは、なかなかもったいないと、日頃から思っているのですよ」

「師匠、それは言わないで下さいよ。ボクは、師匠のようになりたいくて、こうして勉強しているんですから」

「まあ、そのお蔭で、こうして美味しい料理を毎日食べられるわけですが」

そう言うと、ハリモグラさんは大いに照れる。

本当のハリモグラだったら、恥ずかしさで丸まっているのかもしれない。……ハリモグラって、多分丸まるよな。

そんな師弟愛というか、師弟の絆みたいなものを感じながらくつろいでいたのだが、そろそろ休まれてはいかがでしょう、と言われ、俺たちは空き部屋に案内された。

そこはゲストルームらしく、きちんとベッドがあった。

「今夜はここでお休み下さい。ここでしたら窃盗はありませんが、施錠をお忘れなく」

確かに、探偵さんが泥棒でない限りは、ここに押し入る泥棒はいないだろう。

だが、不信気味になっている今は、どれだけ信用できそうな状況でも、気を付けるに越した事はない。

俺たちは、ウォンバットさんが出ていくと、すぐに鍵を掛けた。もっとも、鍵はウォンバットさんも持っているだろうから、あまり意味はないのかもしれないけど。

「今日はゆっくり眠れそうだね」

「そう……だな」

昨日は携帯を盗まれた事で、よく眠れなかったので、正直今はかなり眠い。安心して眠れるなら、それはありがたい。

「じゃあ、おやすみなさい」

ハリオアマツバメは、さっさとベッドに入る。

「あ、ああ、おやすみ」

俺もベッドに入る。ただし、荷物はすぐ傍に置いておく。

蟲(ベステート)を探さないといけないのに、携帯探しをしていて、なかなかできないまま、一日が過ぎていった。

(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

心の歌を奏でて ーぐるみんー ㊤

<http://p.booklog.jp/book/48885>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48885>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48885>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ